

# 記憶の中の マリー



mikatuki98

『えっ！ 真っ白？』

鏡に姿を映して見ている訳でもないのに、夜中にふと目覚めたマリーには完全な白髪になっている自分の顔が見えた。

見えたとは一体どういうことか？ それは一言で言えば＜脳裏に浮かんだ＞という表現が一番分かり易いかも。つまり、一度見た風景なり人物なり、その対象物を思い出している時の映像と同じ見え方だ。ただ、今マリーが見えた、と思っている映像との違いは、無意識と意識の違いにある。今マリーが見ている自分の姿は、自分の意識とは全く別の作用によるもので勝手に見えていると言ってもいい。

そのマリーが今見えている白髪の白さとは銀色がかった白さではなく、茹で上がった蚕の繭から今し方紡いだ糸のようなやや黄味がかった白さで、その質は猫毛のように柔らかそうに見える。

マリーは突然白髪になってしまっている自分の頭髪を見てすっかり意気消沈してしまった。しかしどうやら顔の皮膚には未だ張りがあったので、老人になってしまっている訳でもなさそうだ。とは言え、逆に若いままで完全な白髪になってしまったことへの落胆の度合いは可也高く、ため息をつくことも出来ないくらい目の前の現実には衝撃を受けている。勿論、白髪が見えた直後に鏡の前まで行って自分の髪の色を確かめたが、いつもの色で何も変わっていなかった。なのに白髪の自分の方が現実だ！ と言われているかのような恐怖感さえある。もしかしたら自分の将来の姿なのか？ という考えも浮かんで来る。マリーは絶望的な映像を無理矢理掻き消すように硬く目を閉じてベッドに潜り込んだ。

目を閉じた世界には全く別の光景が広がっていた。眩しいばかりの朝日が差し込み、ベッドの上に横たわっていたマリーの顔を、半分だけ開かれた窓から入って来たのか？ 一羽のオフホワイト色の鳥が羽ばたきをしながら覗き込んでいる。その鳥の身体は掌に乗るくらい小さいが、尻尾の先が細長く垂れ下がっていて、その先がマリーの薄桃色の小さな唇に微かに触れて少しこそばゆい。

「ん～ 朝なの？ あ、おはよう鳥さん…… えっ！ 鳥？ 窓から入って来たのかしら？」

鳥の存在に驚いたマリーはベッドの上で半身を起こし、鳥が入って来たと思われる窓の方を見ようとした。ところが何故か身体が全く動かない。起き上がろうとすればするほど、身体が何か引張られるようにベッドに引きずり込まれる感覚がある。マリーはしばらくの間、何とかして身体を起こそうと必死になっていたが、ふとさっきまで居たオフホワイト色の鳥が居なくなっていることに気が付いた。

と、その途端、眩しい程に差し込んでいた朝日が消え、辺りの様子がマリーの視界にハッキリと見えて来ると同時に、あれほどビクともしなかった身体も自分の意思で楽に動かせるようになっていた。

マリーはベッドに横たわったまま首だけ軽く浮かして、視界に入る部屋の様子を確認するように見回した。

一番に見えたのはママから貰ったお下がりのオフホワイト色のドレスだ。それだけでいつもの自分の部屋だと確信した。そしてさっき部屋に差していた朝日は、東側に窓の無いマリーの部屋だとあり得ないことだ。と言うことは、やはり自分は夢でも見ていたんだろうと思った。

「それにしてもあの鳥…… 鳥は夢の中に居たのだとしたら、じゃあ白髪になった自分の顔は？……あの時は、私、ちゃんと目覚めてたよね？ ……あっ！」

マリーは慌ててベッドの上にあった手鏡を取り、半身を起こして自分の髪を見た。

「髪…… ちゃんと黒だ！」

マリーの髪の色は黒と言っても、自然光に照らされると栗毛に見えてしまうような表面的な黒ではなく、青毛馬のように深く艶のある黒さだ。ただ天然パーマなので、肩を少し過ぎたくらいのセミロングにしていると、毛先が外向きにカールしやすい。それが毎朝気になって、目覚めると直ぐに手鏡でチェックする癖が付いていた。

「あ〜ん、やっぱり……今日もスゴクはねてる……」

いつものようにガッカリしながら手鏡をベッドの上に伏せて置くと、起こした半身を戻し再びベッドの上で仰向けになった。

マリーは跳ねた髪にガッカリしたせいか、虚脱感で底なし沼のように頭が柔らかい枕に深く深く沈んでいく感覚に陥った。そしてこのまま目を閉じると、再び眠りの世界へ入り込んで行きそうな気がしてきた。

そんな感覚になった時、ふいに何処からかマリーの耳元に微かな音が聞こえて来た。

「ん？ 何の音？ ……音、じゃない」

マリーは耳に神経を集中させ聴き入ると、それは声のようだった。

「声…… 誰？ 何か言ってる？」

マリーは更に神経を声に集中させ言葉を聞き取ろうとした。すると……

「マ…… マ…… マリ…… マリー マリー マリー」

マリーと聞こえて来た声は徐々に大きくなり、マリーを呼んでいるように感じられ、マリーの身体全身に鳥肌が立った。

「イヤ！」

咄嗟に拒絶する言葉を発すると、マリーは無意識にブルッと一度だけ大きく全身を震わせた。と、次の瞬間、ゴムボールのように枕から頭を跳ね上げ、脊髄にバネでも仕込まれているかのような物凄い勢いで起き上がると、やっと本来の自分に戻ったような気分になった。

しかしそれもその筈。実は、今し方手鏡で自分の顔を覗き込んでいたマリーも、鳥が現われた世界も、どちらもマリーの夢の中だったのだ。目くるめく夢の連続。その境目に気付かないまま、彼女はやっと現実に目覚めた。

目覚めたが、ベッドの上で記憶を辿り思案する彼女。特に今だ鮮明に耳に残る、〈マリー〉と自分を呼ぶ声の主のことが、一番に気に掛かる。

「う〜ん、この部屋には誰も居ないから、家族の誰かが起こしに来てくれた訳でも無いし、それにあの低くて淋しそうな声を出すような人間は家族に居ないし、ネコのアンドレはニャーしか言えないし、ママの悪戯？ まさかね…… パパならあり得るけど、パパは出張で帰りは週末

だし…… あっ！ 去年死んだおじいちゃんとか？」

寝起きで、しかも殆ど自覚の無い夢の連続にボーっとしたままの頭で考えながら、彼女はやっとベッドから両足を下ろし、フローリングの床に裸足の足裏をペタリと着けると、おじいちゃんのようにゆっくりと立ち上がった。

「……おじいちゃん？」

ポツリと呟いた瞬間、マリーの全身に稲妻が走り、狂気に満ちた奇声を発したかと思ったら、怒涛の如く喋り出した。

「キャー——！ イャー——！ エエエッ！？ チョ、チョ、チョット待ってよ！ 私はマリーなんかじゃない！ 私？ 私は万里子。そうよ、万里子よ！ 去年死んだおじいちゃんが付けてくれた名前だもん。小さい頃からママに散々聞かされた話よ！ おじいちゃんが中国の万里の長城に観光に行って、凄く感動したからって、帰って来るや否や、興奮しながら言ったんだって。『今度生まれてくる孫の名前は万里子にしてくれ！』 しかも、未だ女の子かどうか分からない時期だったのに、絶対女の子だからっておじいちゃん言い張って。でも、本当に女の子でママもビックリしたって。で、結局おじいちゃんの希望通りに私は万里子になったんだもん。それにそれに、ネックネームもマリッペとかマリマリだったし、ママだってパパだって、万里ちゃんだし、アンドレも……あの子はいつでもニャーだけど…… て、ア——ッ！？ チョチョッ、私の髪の毛……」

万里子は慌ててママに貰ったお下がりの木目調のドレッサーの前に駆け寄り、首を突き出して鏡を覗き込むと、マジマジと自分の顔と髪の毛をチェックした。

「顔は…… ちゃんと19歳。よし！ と。髪の毛も…… あ～ん、やっぱり寝癖でボサボサだ。でも、ちゃんと黒。よし！ と。はあ～良かった。白髪じゃないよ……」

万里子はやっと、鏡が無いのに白髪の自分の顔が見えたことも、鳥が現われたことも、マリーと言う誰かの声が聞こえたことも、全て夢の中の出来事だったことに気が付いた。

「それにしても何で私って夢の中で自分のことを<マリー>って思ってたんだろう？ それと鳥…… 綺麗だったなあ～ オフホワイト色？ あーっ！ そう言えばドレッサーもオフホワイト色だったよね？ 木目調のよりアッチの方が好きだな…… でも、あの声……」

万里子の中であの不気味が声が鮮明に甦って来た。

「……うう、ダメだ」

なんだか寒気がして来たので、今日のところはここら辺で考えるのを止めておくことにした。何と言っても、今日は万里子にとって一大事の日だ。

「さてと…… 今日はアナウンサースクールの最終試験日だもんね。面接あるし。万里子、笑顔でファイト！」

万里子は自分に小さく湯を入れると、夕べの内に準備していた勝負服に着替える為にドレッサーの前からクローゼットへ移動した。と、階段の下から母親の声がした。

「マリー起きてる？」

「ハイ！ 起きてるよー」

いつものように元気良く返事をした直後、万里子はハッとした。

「えっ？ 今ママって、マリーって言った？ 言ったよね？ マリーって、え——っ！ いつも万里ちゃんなのに……」

万里子に再び悪寒が走った。が、ゆっくり考えてる時間はもう無い。今日は大事な面接日だ。遅刻なんて持てのほかだ。

「遅刻厳禁だよ、万里子！ 考えるのは後々。済んでからにしようね！ うん」

万里子は自分にそう言い聞かせると、幼子のように首を大きく縦に振って頷いた。

安藤万里子。

性別女性。両親共に日本人の血を受け継ぐ。

2007年10月現在19歳。日本国東京都在住。

安藤万里子の父は、かつてのスウェーデン貴族の魂。

母は、かつてのオーストリア王室に仕えた乳母の魂。

万里子と名付けた祖父は、かつて万里子に珍しい鳥を献上した、中国商人の魂。

そして安藤万里子は、かつてのフランス王妃マリーアントワネットの魂である。

二百数十年後、再び生まれ変わって日本人安藤万里子として、

新たなる人生を送っていることを、誰が想像し得るであろう。 了